

広瀬 節 夫 著

『国語科授業構築の原理と方法』

国語科授業の構築ということば、考えてみれば、現場国語教師の日々の実践に他ならない。しかし、現場の立場でいえば、その原理と方法ということになると、まこと

におぼつかない状態のままに、一日一日をすごしているといえよう。本書は、現場での豊かな経験をふまえられた広瀬先生が、実践報告としての『国語

科学習指導の展開』（昭和49年3月・文化評論出版）に続いて、読むことの授業の成立条件を明らかにすることをめざして、あらわされたものである。

全体の構成は、次のようになっている。

- I 国語科授業の構築と評価
- II 国語科授業過程への考究
- III 国語科授業づくりの方法
- IV 国語科授業構築のために（1）
— 文学教材の場合 —
- V 国語科授業構築のために（2）
— 説明・論説・評論教材の場合 —

第I章では、教材、あるいは単元全体の構想にかかわる問題を、第II章では、指導過程にかかわる問題を、また、第III章では、指導方法、主として技術にかかわる問題をとりあげられ、細密な考察が加えられている。

これら前半第I～III章の、いわば理論編を読んで強く印象づけられるのは、一貫して、学習者にとばを見つめさせようという姿勢がくずされていないということである。特に第III章では、大村はま先生をはじめとする実践をふまえて、その意義的的確

に説明されながら、きびしくことばを見つめる指導が求められている。また、第1章の、評価にかかわる論稿も、示唆されるところが大きい。

後半第IV・V章は、具体的な教材を中心とした、いわば実践編というべき部分であるが、ここでは、学習者の実態をふまえ、その視点に立って授業を構築しようという姿勢が強く感じとられる。

第IV章の、七「黒い雨」(井伏鱒二)の可能性、はその中心であろうが、例えば第V章の、三「川は生きていく」(富山和子)で何を教えるか、についても、1でその教材の内容・主張を、2で教材としての価値を、3で、子どもたちの読みの可能性、として、子どもの実態をもとに、指導のあり方を考察する構成になっている。

それぞれの論稿は、14年という年月の間に、もどめに応じて執筆したものであるということであるから、それらの論稿がすべて同じ構成になっているわけではないが、理論の中に子どもが見えるということは、現場にいる者にとって重要な意味をも

っている。

広瀬先生のお人柄そのもののように、真摯で着実であり、国語科教育にたずさわる者にさわやかな落ち着きを感じさせてくれる一冊である。

なお、本書により第15回全国大学国語教

育学会石井賞(昭和63年)を受賞されていることを申し添えておく。

(A5判、四三四、ページ、昭和六十二年六月十日、深水社刊、四五〇〇円)

(三浦和尙)